vol.36 約3500年前の交流

面縄東洞式土器（おもなわとうどう）式土器

■ 出土地：古我地原貝塚

縄文時代の沖縄では、日本本土と同様に土器を用いて生活をしていました。今回はその時に使われていた土器のひとつである面縄東洞式土器をご紹介します。

面縄東洞式土器は、鹿児島県の徳之島に所在する面縄貝塚群第４貝塚東洞部を標識遺跡とし、遺跡名からその名が付けられました。時代は、縄文時代後期頃（約3500年前）と考えられています。

土器の形は、深鉢形、壺形、器台（きだい）付き土器の３種類が見られます。また、口の縁の形状は平坦な形状が多いとされています。

土器には、先端が三角形状の道具を押し引きして、籠の編み目のような文様を施しています。

この土器型式は、北は鹿児島県の喜界島や奄美大島から南は沖縄本島や慶良間諸島まで出土しますが、若干の地域差が見られるようです。

今回展示している面縄東洞式土器は、うるま市古我地原貝塚の出土です。

今では違う県である奄美の島々と沖縄の島々ですが、同じような文様を施す土器を使っていた時代があり、何らかの交流や関わりがあったことがこの土器から分かります。〈奥平　大貴〉